



3月11日午後2時46分、吐き気を誘うゆらゆらする横揺れがしばらく続き、ビルがギンギンと不気味に音を立てた。間もなく同じフロアの事務所の入り口は人だかりとなり、そこに置かれている大画面のテレビには、車が流されている異様な光景が音声もなく映し出されていた。一瞬何のことかわからずに見ていると「津波ですよ!!」と教えられ、ただ「凄いことになりそうですね……」と答えたのを覚えている。その後まるでスクロールを浴びるように、地震、津波、原発事故の惨状を伝えるマスメディアの報道に毎日曝されることとなった。

3・11は第2次世界大戦以来の日本の国土、国民に大きな被害をもたらした出来事である。

3・11以降

情報広報部長

山科 賢児

自然の脅威に立ち向かうために様々な防災対策を講じてきたが、自然が数段上手であり、人間は自然の一部であり、決して自然と対決したり、競争したりする存在ではない。人間は自然の恵みのもとに生きているということ、自然の恵み知らされた。地震、津波という自然災害だけならめげず、諦めず、今回もさあ復興だ、という機運になったであろう。しかし近代技術の象徴である原発が、自然の脅威が自然災害に破壊され、そのうえ原発事故が自然災害以上の大災害を生み出してしまったことが明らかになってしまった。対応が後手にまわってしまった、放射能汚染水を海へ流すなどの暴挙にも出てしまった。今後地球に取り返しのつかない影響が出なければいいのだが。

被災地は復興作業が始まったとはいえ、今も多くは依然がれきの山のままである。被災者たちは当初の精神的緊張、不安から回復したかもしれないだろうが、憂鬱感、喪失感、絶望感が押し寄せてくる日が始まっているのではないだろうか。そしてただ呆然とがれきだらけの村、街を眺めて放心するしかなく、これからの将来については何も考えられない空白の状態が続いているのではないだろうか。だが直ぐに「どのようにして生きていくか」と向き合わなければならなくなる。震災のもたらした経済的損害の大きさと精神的衝撃は計りしれない。このような未曾有の経験をする人々の価値観、生き方は少し変化するのではないだろうか。被災者たちだけではなく、マスメディアの目を通じても震災を見つめ続けてきた我々も、この震災を機に社会や人生への考え方を再考する機会となっている。

震災から約一カ月後の夜の東京を見た。節電のため新橋SL公園の照明は消え、人々は携帯の明かりを頼りに会話をしていた。彼らがとても暗く元気がない表情に見え、これが日本を背負って働いているサラリーマンで賑わう新橋のかと驚いてしまった。街灯は消え、客待ちをして長い列を作るタクシーのテールランプだけが明るくて印象的であった。またダイヤの乱れていたJRの車内が朝のラッシュアワーのようになっている。じつと黙って窮屈な電車の中で乗客は我慢していた。震災の影響で感情の吐露を自粛していたのか、それとも震災によって覇気を失ってしまったのだろうか。酔っている乗客もいたはずなのに車内の静けさは異様であった。日本が変わってしまったような錯覚を覚えた。

3・11以降どのくらいかわかるかわからないが、日本は必ず復興する。だが復興が今までと同じように物質的豊かさを求める形がよいのか十分検討すべきかもしれない。戦後瞬く間に先進国の仲間入りし、経済的には豊かな生活を勝ち取って行きついた先が、今の「失われた20年」後の日本の姿である。解決にこずついていたところにこの震災である。ならば打開のために従来とは異なる形の復興モデル、経済成長ばかりを追い求めない国づくりを模索してもいいのではないだろうか。チュニジアの政権交代の際、ソーシャルメディアが起爆剤になったと言われている。一人一人の発信する情報が拡大し、次第にうねるように巨大なメディアを形成し、社会を揺り動かす民主化を実現した。日本はバブル崩壊後、社会に流動性がなくなり、人々はリスクを冒す勇氣、決断力を失ってしまった。せつかくソーシャルメディアを有効に活用できる環境があるのだから、個々の思いを束ねて内から外へ噴き出す力、社会の閉塞感を打ち破る力にまともな力はないものだろうか。災害復興を始めるにあたって、国の進める再建事業が被災地の声を反映するため、被災者やボランティアの発する現場からの情報は大切な声となる。ないことを願うが、非被災者の震災についての関心が次第に日常生活の中に埋没して薄れ、継続的な支援が徐々に消えてしまうのを恐れる。すばやい決断をしないと、従来の手法、価値観によるステレオタイプな復興になってしまふ。忘れないうちに、心が熱いうちに動きださなければ、結局被災者目線のきめ細かい復興にならない。まず決断力と時代を先取りして、初めは小さな一歩でかまわないから、思い切つて未踏の道を目指すことである。